

2022年2月26日(土) 15:00~17:00

場所 オンライン

主催 P4C in schools KANSAI-JAPAN

発表者 宮崎貴耶 大阪府小学校教員

対象 学校関係者

参加費 無料

参加者 14名

発表内容

P4Cを取り入れた道徳授業

道徳って何だろう？からの出発

1. 道徳とは何だろう？

宗教とも政治とも違う

「道徳」ってどこにあるの。

学校での道徳をどう考えるか

ここでP4Cとの出会い⇒どういうことか

道徳には答がない！！ 学級のみんなで探究しない??

学校教育とP4C

教科としての道徳とP4Cはどう関わるのか。

教科の内容がありつつ、自由に考えるとか子どもの公共性はどう養えるのか？

そこで考えたこと

- ・学校教育の場で、P4Cの掲げる真の探究は目指せるのか？
- ・道徳の教科にP4Cは落とし込むことができるのか？
- ・教師が探究を深める発問とP4Cの問いはどう違うのか？

今日はこういったことを議論したい。

2. 模擬授業(宮崎さんが教師役で、参加者は子ども役)

テキストは5年生「友の命」(東京書籍「新しい道徳5」)

ジャムボードを活用した模擬授業(Zoomでの操作が難しかったが、参加者の中にICT専門の人がいて、助けてもらった)

テキストをもとに、友情、あるいは信頼について考えていく。普段よく考えていることだと思うので、今日はじっくりそれを考えたい。

テキスト朗読の後、チャットに物語についての感想を書く。

教師の問い：どういうことについて議論したら友情とか信頼について考えられるかをイメージしながら問いづくりをしたい。思いついた問いを、手を挙げて発表してもらおう。

ジャムボードに問いを書く（これらの問いを参加者は共有）

親友のためにどこまでできるのか

信じるってどういうこと

信じることでできる人が親友なのか⇒親友なら信じられるのか

親友であれば、自分の命を捨てられるのか

親友は100%信じられる？

信じられるから親友？

何を根拠に信じることができるのか

信じるときに疑わない？

命をかけることが友情なのか

親友だから相手のことがよく分かるのか

以上10個の問いから話し合う問いを決める

この中で最終的に「信じるってどういうこと」が選ばれる。

続いて

「信じるってどういうこと」について自分の考えを書く

ジャムボード上の意見（自分の意見も含む）について意見を言いたい人がいれば、手を挙げてください。

「信じたいということが気になる。信じることと信じたいということとは別」

「100%信じるっていうことは現実にあるのかな。疑うことがあってもそれも含めて相手を認めるということが信じるということ」

「疑って、信じてということを繰り返す」

「一瞬たりとも疑わない。疑うんだったら信じていない」

（発言者が、手を挙げた人を次の発言者として指名する）

「100%信じたことってありますか。私はない。信じて期待したときに裏切られたときのショックは大きい」

「無心、あるいは滅私でなければ、信じられない。自分というものの存在を無くさなければ、信じることはできない。自分があれば事故を最優先してしまう」

（みなさん、5年生の道徳ということをお忘れなく）

デモンはピシアスのことを無心で信じていたのか？

「無心ではないけど、覚悟があった。デモンはすでに自分の命を捨てるということを決めていた。信じる信じないではなく、自分はそうするんだと決めていた。疑うことも信じることもなかった」

命を捨てることが友情なのかということと絡めると、どう考えますか。

「友情というものをそんなに重く考えないといけないのかな。親友と言われることに重荷を感じているような子もいる」

「こういう物語は何を言いたいんですか。私は理解できないんですけど。日常的にはあり得ない話だと思う。デモンは人生を嫌になっていたのではないか」

こういう流れで授業をしていました。

3. 実際の授業における構成

価値分析を大切にしている。信頼と友情についての考えを抱いて、授業に臨む

授業の流れ

感想

問い出し

テーマについて対話を進める

(友達だからって言って戻ってきたのではない)

親友と友達とはどう違う？

振り返り

みなさんへの質問

1. P4Cを支える要素とは何？
2. 道徳に「P4C」を取り入れることはできるのか
従来のもものとどう違うのか。

非常に面白かった。

議論

哲学のイメージ

伝統的な哲学者の学説

驚き・発見

哲学の初めは驚き。今日も多くの驚きと発見があった。そこから真理へと向かっている、あるいは対話の場でこそ真理が現れている。これは楽しいことではないか。道徳こそ P4C を取り入れるべきではないか。

P4C の P は哲学。一般にしているのは哲学対話ではないか。何かを探求しているという感

じではない。ファシリテーターが哲学的な探求をしてはいないのではないか。

自分を出さないファシリテートの仕方。子どもから出てくるのを待つ。

子どもになって考えたとき、自分の問いに～してもらった。こういう問いが自分の中で問題になっていたんだということが納得してもらえそうな道徳の授業が欲しい。自己更新していける問い。

学校教育の中で P4C を取り入れようとする、それなりの共通理解が必要ではないか。

子ども自身の受け止め方も多様かもしれない。それでも、対話は大切ではないか。子どもたちが自由に意見を出せる、子ども哲学なら規制なしに、自分の意見を出せる。子どもたちの声で、自分の思っていることとか、問いを作っていけたら、それだけでも哲学的要素が入って来る

今日実践して見せたような授業が、他の教師からこれが道徳だよと評価されたのはびっくり。

子どもが、探求、問い続けようとするをを生み出すことが重要。問いを子どもが自分で見つけたり、問いを生み出していく活動、総合に取り入れられている P4C の側面が結構強い。驚きと発見というよりも、驚きと納得。自分の中での納得解。哲学対話では納得も大切。暫定解という意味での納得。そこからまた出てきた問いを考える。道徳の終わりが道徳の始まりになる。思考力を育むのであれば、道徳以外でもできる。しかし、道徳が一番問いを生み出しやすいのではないか。

総合でやる方が、制約は少ない。道徳の場合、やはり、例えば価値項目に注目して、どのように収束させるかということが評価され、その過程を楽しんでいる子どもたちの様子を見ていないという感覚がある。教師は過程を見る力があまりない。慣れてない。ファシリテートすることはやはり難しい。

戦後の道徳教育の歴史も反省する必要はないのか。

話し合いの場が必要であるということは、昔から教師は考えて来た。その素材、発問の仕方があるのではないかということから、子どもが発問できるようになっていけばいいのではないかい。それが育むべき資質能力ではないか。教師の発問がうまくなって、子どもに対話させるのではなくて、子どもが対話することを通して、自分なりに対話をする場を維持していく、そういう力が養えるようになってくればいいのではないか。そのためにはどうしたらいいのか。探求の力を持つ子ども・学級をどう育てるか。探求の共同体におけるコミュニティーボールという言葉の意味を捉え直す。

一年を通じて、どう子どもが発達していったのかということにも目を向けるべきではないか。